

研究者としてのキャリア形成について考える  
—現場における研究継続の土台となった修士論文作成の経験—

○ 大阪労災病院治療就労両立支援センター 本田優子 (009129)

キーワード3つ：実践を研究につなぐ 実践と研究の両立 求められる研究支援

## 1. 報告者プロフィール

筆者は大学卒業後 20 年であるが、研究にかかわるようになったのは直近 5 年（うち修士課程 4 年）のことであり、研究者のキャリアというには不十分である。しかし今回このような機会に恵まれたことで、実践と研究をつなぐ経験、現在の現場で研究を日常化していく経緯を振り返り、報告したい。（略歴：2000 年関西学院大学社会学部卒業。2019 年大阪府立大学人間社会学研究科博士前期課程修了。2000～2014 年は病院の MSW として勤務し、2015 年に大学院進学。大学院最終年度にあたる 2018 年 4 月より現職。）

## 2. 研究者としてのキャリア形成の道のり

### （1）実践と研究をつなぐ経験（修士論文作成過程）

筆者の修士論文は「二次救急における治療受入困難事例にみられる社会的排除の研究—精神・身体合併症事例の受入経験を有する医療機関への観察調査とインタビュー調査より—」である。

#### ①実践者がプリミティブな違和感を研究にしていく経緯

研究のきっかけとなったのは、精神身体合併症事例の救急搬送受入について、筆者が感じていた救急スタッフの熱心な受入姿勢と、地域支援機関による「病院は精神身体合併症の患者に差別的である」という評価のギャップであった。これを研究に転じていくには以下の経緯を辿った。まず日本の救急の現状把握として、精神身体合併症事例の受入困難を示すデータがあること、先行研究ではその背景要因が派生的に示されていることを確認した。それら派生的に示された背景要因を整理したところ、ミクロ・メゾ・マクロにわたっており、さらにその事象を社会的排除の概念に照らしたところ、その様相は社会的排除と一致すると考えられた。これにより研究目的を受入困難の背景要因の全体像を明らかにすることとし、当初の関心について、研究における位置と視点を整理した。これを受け、調査方法は救急スタッフを取り巻く環境の現実を捉えるために 2 病院の救急部門に 2 週間（夜間含む）の観察調査を実施、その後インタビュー調査とした。なお救急部門の観察調査は異例であり、学内の倫理審査のみならず 2 病院の倫理委員会への出席という手続きを要したことも貴重な経験であった。観察調査のフィールドノートとインタビュー調査の逐語録という膨大な質的データの分析は骨の折れる作業であったが、M2 時に仕事で質的調査と分析をした経験もあり比較的スムーズに進行した実感がある。結果として、国や地域、組織

内の協力がなく救急現場が孤立し受入困難となる「1点集中責任押しつけ体制」と、逆にそれらの協力を得ることで救急現場が安心して受入れる「4層の協働責任体制」という、ミクロ・メゾ・マクロにわたる背景要因の相互作用を示す質的分析の全体像が見出された。

## ②現場に還元するための考察

最も難航したのは考察である。問題への対策を考察するにあたり、結果の一部を根拠に精神医療との連携促進、診療報酬による経済的保障といった医療領域で完結する提言でも修論として成立した可能性もあったが、調査結果全体を捉えた時、この受入困難という事象について本質的な説明を要すると考えた。つまりは調査結果と社会的排除という概念を交錯させる作業である。現場の実践者である筆者にとって最も遠い位置にあると思われた概念レベルによる考察は非常に難渋する経験であったが、このことにより、医療領域で抱えていた問題を地域社会に広く開き、国や地域、組織、現場による社会的包摂策の編み出しが重要であることが考察され、具体的提言を示すに至った。なお、①②の経緯は3回に分けて学会発表する機会を得ている。

### (2) 現場で研究を日常化していく経緯（現在の職場）

現在の筆者の所属組織は「治療と就労の両立支援」を推進が目的であり、業務は就労支援に特化している。特に担当するがん治療と就労の両立は、障害と就労の両立に比べ新しい支援である。また当職には両立支援を普及させ、政策に提言する使命もある。しかし入職当初はこの普及内容に求められるものは実践報告であり、研究自体は業務ではなかった。そこで、研究調査を計画実施し、その結果を通じて具体的支援方法や人々の生きづらさの構造的背景を医師や産業医等に示したことで普及活動依頼が大幅に増加、研究が業務として認められ、両立支援に関する投稿論文、依頼論文への対応も業務となった。以降、実践と研究の往復が日常になりつつあり、現在のプリミティブな関心は、「治療しながら働く人々が常に社会に申し訳なさを抱えるのはなぜか」であり、労働に対する日本人の価値観に関する文献を読み進めながら現場の支援や姿勢のヒントを探している。

## 3. 求められる研究支援

現在の職場で研究を業務にできたのは、修士課程で時間をかけて獲得した研究調査実施および分析手法、理論や概念レベルから現場の具体的実践を発想し生み出す感覚が有効に作用したと考える。またその経験は指導教員による社会福祉領域にとどまらない文献や他教員の紹介、学会発表の推奨、質的調査を業務とする仕事の紹介といった機会の提供がタイムリーになされていたことにもよる。そして、大学院の所属を離れた今も相談できる関係があることは、現場で研究を続ける上では重要と考える。

また、実践と研究を両立できる現在の職場環境の特徴は、支援対象が特化された新しい支援を担っていること、それが政策に関与していることであろうと考える。あくまで一例ではあるが、そうした特徴をもつ就職先の情報が入手できることは、修士課程修了後も現場において研究を続けるひとつの手段と考える。